

# 江戸後期の本両替経営について

—— 錢屋市兵衛を例に ——

中 川 す が ね

はじめに

錢屋（中西）市兵衛は大坂の本両替錢屋佐兵衛の別家で、自らも本両替仲間にも所属して両替店を営業していた。本論文は、錢屋市兵衛の経営分析により、近世後期の本両替、とりわけ研究蓄積の乏しい中小規模の本両替のありかたや本家との関係を明らかにすることを目指す。

錢屋佐兵衛は延享五年（一七四八）に、錢屋弥助の別家として大坂南部の島之内石灰町に本両替店を開店した。元文改鑄後の好況期に貨幣売買と商業金融で資本を蓄積し経営を拡大したが、同時に別家を創出してその何人かは本両替を営んでいる。三代佐兵衛の文化期（一八〇四～一八）末からは大名貸にも乗り出し、天保八年（一八三七）には錢屋佐一郎を分家させて両替部門を担当させた。これ

以降錢屋佐兵衛は大名貸などの貸付業を経営の中心とした。

錢屋市兵衛に関する史料は、錢屋佐兵衛家に伝来した逸身家文書（逸身喜一郎氏所蔵・大阪歴史博物館寄託）に含まれている。<sup>1</sup> 逸身家文書はかつて蠟燭が入れられていたという大きな長持のなかに、木箱等にまとめられて収納されていた。錢屋市兵衛の史料は主として木箱単位3の35と36と43にあり、内容的には奉公人請状・借銀証文・質物証文・両替取引証文等の証文類である。また木箱単位2には錢屋市兵衛の銀控帳一冊があった。ほかにも佐兵衛の大名貸や講関係に関連して市兵衛の名前が出てくるものがある。

## 一 錢屋佐兵衛の暖簾内について

本章では錢屋佐兵衛の暖簾内について概略を述べる。<sup>2</sup> 錢屋佐兵衛の分・別家に関する主な史料は、錢屋佐兵衛の銀控帳<sup>3</sup>（これ以降錢

佐銀控帳と略記)の店出しや元手銀支出の記載である。店出しで最も古いのは、安永元年(一七七二)の甚七の記事である。前年度に佐兵衛が購入した松原町の家屋敷に甚七の店を出させていることはわかるが、元手銀渡しの記載はなく、後年の別家店出しとは様相が異なる。<sup>4</sup>

次に安永四年に「平兵衛店出し」として元手銀三貫目が支出されている。この時には初代佐兵衛は隠居して二代佐兵衛が相続していた。<sup>5</sup>開店から二〇年を経て別家を創出し始めていることがわかる。鴻池屋善右衛門や平野屋孫兵衛などでは手代として二〇年無事勤続して別家を許されたとされる。<sup>6</sup>初代佐兵衛の奉公人が別家として独立し始めたのであろう。ただ彼らが本両替を開業したかどうかはわからない。

二代佐兵衛はその後天明七年(一七八七)に「清兵衛店出元手銀」三貫目を支出したことが銭佐銀控帳に載る。二代の子飼いの奉公人が別家となってもおかしくない時期である。その後、寛政五年(一七九三)から享和期(一八〇一〜〇四)にかけては、銭佐銀控帳の頁が後世の添付物のためにほとんど読めない。ただ逸身家文書や両替関係の摺物などから、この間少なくとも本稿で取り上げる市兵衛のほか、武兵衛・市兵衛・勘兵衛・宗兵衛(惣兵衛)が別家して本両替として独立したことがわかつている。

別家の元手銀は当初は銀三貫目だったが、寛政期には銀五貫目に増額されている。本両替の別家元手銀は大家では三〇貫目・五〇貫目に及ぶこともあるとされ、<sup>7</sup>本両替平野屋孫兵衛の別家初代武兵衛に与えられた元手銀は九貫目であるので、やや少なめに感じられる。しかし銭屋佐兵衛自身の元手銀が四貫八〇〇匁だったので、佐兵衛の別家の元手銀もその程度とされたのではないか。

三代佐兵衛は寛政八年に相続はしたものの幼く、成長して指揮を執り始めるのは文化期である。文化二年(一八〇五)に喜介、同八年に又兵衛、同九年に林兵衛、文政二年(一八一九)に七兵衛・喜兵衛と、多くの別家を創出した。それ以降の後半生においては別家を創出してない。この内銭屋又兵衛・林兵衛には、元手銀渡しに先だって三年ほど出勤料というまとまった給与を与えていることが注目される。この間、おそらくは本家住み込みを免除して別宅を許して妻帯もさせ、通勤して本家の仕事をさせるかわりに出勤料を与え、その後に独立のため元手銀を与えたものと考えられる。この別家に先だつ「宿這入」・「仮宅」といった制度は他の商家でも行われているが、銭屋佐兵衛家でも文化期には奉公人別家の制度が整えられたと考えられる。

天保四年(一八三三)に家督をついだ四代佐兵衛は奉公人を別家させているが、彼らは本両替を営んではない。また本家に通勤し

て働く別家のありかたが中心となった。





以上から、商業金融で経営を拡大した二代と三代目の前半にあたる文政初年までが、銭屋佐兵衛家が本両替の暖簾内を形成しようとした時期といえる。この時期は、御用金賦課・貨幣の帳合取引の延屋仲間への分離・両替役銀賦課などの幕府政策の影響により本両替仲間の数は減少した時期である。ただ本両替が銭両替やもと本両替の大名貸商人を得意先として系列化し、三者の振手形が相互に流通するようになって、本両替の金融システムは拡大していた。かつてない信用社会が築かれたのであるが、銭屋佐兵衛も別家を本両替として独立させてその一翼を担ったのである。

本両替仲間は株仲間ではないが、仲間に入るには既存の本両替の親族ないし奉公人など縁者である必要があった。奉公人の場合、本家が仲間の地域組織である小組に申し出て了承をとり、本家の願書と小組の添書をもって本両替仲間の寄合で出願し、仲間行司が吟味して許可にいたる。<sup>8</sup> そのため別家が本両替になるかどうかはまず本家の意向次第なのである。

銭屋佐兵衛家が文政初期以降新たな別家本両替を創出せず、別家のありかたも通勤別家へと変えていったのはなぜか。推測だが、三代佐兵衛が文政二年頃から大名貸に本格的に乗り出したためではないだろうか。領主金融は大資本が必要でかつ踏み倒しなどによるリ

スクが高いことから、暖簾内の分・別家が本家の領主金融に加入するかたちで投資することが多い。近世後期の鴻池屋善右衛門の例でも、近世後期には暖簾内の分・別家が本家の領主金融に加入・投資し、本家に通勤して大名貸業務に携わっており、暖簾内の資本と人が本家の領主金融に集中させられている。

なお近世大坂には「銭屋」という屋号を名乗る両替商は多数いたが、これがすべて銭屋佐兵衛の関係者ではない。文化六年「大阪両替手形便覧」<sup>10</sup>には「銭屋」と名乗る者が二一名載る。両替手形便覧は振手形や預手形などの手形類を取り扱う者の名前と店の住所を記載する摺物で、屋号ごとにまとめて記され、同屋号のなかではまず本両替が載り、次に銭両替（銭屋）が並ぶのが原則である。<sup>11</sup> 銭屋の場合筆頭の備後町権兵衛以下一五名が本両替で、一六番目の米屋町太助以下六名は本両替以外の銭屋と推定される。

嘉永五年（一八五二）三月の「浪華両替取引手柄鑑」は番付形式の両替系摺物であるが、珍しいことに上位者ののれん印が掲載されている。銭屋佐兵衛ののれん印はであるが、別家の銭屋宗兵衛はとそれと何かをつけ加える形ののれん印である。また銭屋忠兵衛・銭屋清右衛門と、この両人はのれん印に富士が入っている。これから銭屋を名乗る一統のうちに、二つ以上の暖簾内が含まれることは確実である。

文化六年の「大阪両替手形便覧」では、筆頭の錢屋権兵衛の次に錢屋佐兵衛の名家である錢屋弥助がきて、その次に錢屋佐兵衛が記載される。それから二人において錢屋佐兵衛の別家勘兵衛、それから六人において別家市兵衛が記載される。錢屋佐兵衛の暖簾内では開業順である。これから、両替手形便覧では同一の暖簾内では、本家筋にあたる者、開業が古い者が先に記載されていると考えられる。

なお錢屋佐兵衛の暖簾内の本両替として現在確認できるのは、錢屋武兵衛、同市兵衛（中西氏）、同勘兵衛、同宗（惣）兵衛（辻氏）、同林兵衛、同清吉、同又（亦）兵衛、同源兵衛（逸身氏）<sup>12</sup>の八名である。ただ本両替仲間の史料は断片的なので、これ以外の別家も本両替を短期間行っていた可能性はあり、錢両替であった可能性になると全くわからない。

両替系の摺物のなかには、先に挙げた「浪花両替取引手柄鑑」のように番付仕立てにしてある種の評価を加えているものがある。この評価が経営実態を反映したものとは必ずしもいえないが、世間の評価はよみとれるだろう。錢屋一統の評価について検討しておこう。

天保九年（一八三八）二月改正新版「浪花両替手柄競」には、別格三七人と東・西方各八六人が書き上げられ、合計二〇九人の名前がある。天保九年初の本両替の数は一六三人なので、<sup>13</sup>別格以外に二〇人弱の本両替以外の手形取り扱い商人―錢両替や大名貸商人など

広義の両替商人―が記載されていることになる。さて「浪花両替手柄競」において、錢屋弥助・同佐兵衛は頭取、同源兵衛は世話人として別格扱いであるが、これは事実上本両替の業務から退いている名誉職的な扱いである。また西方の前頭二枚目（西の最高位である大関炭屋安兵衛から数えて五番目）に分家の「備後丁錢屋佐市郎」、東方の前頭一七枚目（東の大関鴻池庄兵衛から数えて二〇番目）に「本一錢屋惣兵衛」、西方の前頭三〇枚目に「南瓦錢屋勘兵衛」、同三一枚目に「石灰丁錢屋市兵衛」が記載されている。これから天保八年末に分家・開店したばかりの錢屋佐一郎が、早くも両替商のなかでもトップクラスの存在として評価されていることがわかる。また惣兵衛は上から三割、勘兵衛・市兵衛は四割の内に入っており、錢屋の別家は両替商のなかでは中堅クラスに評価されている。

またこれと時期的に近い天保八年四月の「浪花持丸長者鑑」<sup>14</sup>をみてみよう。これには別格を除いて東西各一四七人の長者が記載されているが、「石灰錢屋佐兵衛」は西方の前頭三七番目（西方大関三井八郎右衛門から四〇番目）と上位であるが、「備後四錢屋源兵衛」は東方の一三二枚目（東方大関鴻池善右衛門から一二四番目）、「本町一錢屋宗兵衛」は東方一三〇枚目（同一三三番目）、「瓦屋錢屋勘右衛門」（勘兵衛）は同一三三枚目（同一三六枚目）によりやく入っている。先に検討した「浪花両替手柄競」では市兵衛と勘兵衛の順



位はわずかな差であるが、「浪花持丸長者鑑」には市兵衛は入っていない。

なお大坂町人の経済力の評価に関しては幕府御用金額も参考となる。天保十四年の錢屋一統の御用金請高は、佐兵衛銀一四〇貫目(三ヶ年納)、佐一郎六〇貫目(同)、宗兵衛三三貫目(同)である。<sup>15</sup>当時本両替を廃業していた林兵衛・勘兵衛・源兵衛、市兵衛などの名はない。<sup>16</sup>嘉永六年十一月に海岸防備のため命じられた御用金は、「嘉永御用金」に載る書上では、石灰町錢屋佐兵衛・備後町四丁目錢屋佐一郎が二人で銀一三〇貫目、中船場町錢屋源兵衛が八貫一五〇匁、本町一丁目錢屋みね代判平兵衛が一八貫目である。<sup>17</sup>錢屋市兵衛にも賦課されたが、減額の嘆願書が残っている。

以上から、近世後期の大阪で錢屋佐兵衛や佐一郎は文句なく大両替で長者とみなされていたが、それ以外の源兵衛・勘兵衛・市兵衛は中より少し上の本両替とみなされ、その中でも源兵衛・宗兵衛・勘兵衛は長者番付下位に位置づけられるが、市兵衛は登場しないという差異がある。両替系の番付でかなり上位にいないと、長者番付には掲載されないのである。

「大阪昔時の信用制度」<sup>18</sup>には、天保頃二十万両以上の両替店が五〇余あったと記されている。仮に一両六十匁として銀一万二〇〇〇貫目である。天保期までの銀控帳の有銀額は、錢屋佐兵衛で最大四

八四五貫目、大名貸・家屋敷経営の有銀を加えても七〇〇〇貫目余である。これに不動産や銀控帳から除かれた債権や蓄蔵金を加えれば一万二〇〇〇貫目に近づくかもしれない。市兵衛の銀控帳の有銀は最大で銀一三七貫目余であるので、佐兵衛の三パーセント以下である。同じ本両替といっても資本や資産には相当の格差があったといえよう。

さて次に、次章で詳しく検討する錢屋武兵衛・市兵衛・清吉を除く別家について、本両替を開業した順に概要を述べる。

**錢屋勘兵衛** 先述したように、錢佐銀控帳を見ることができない寛政五年以降に別家したと考えられる。寛政九年九月に南瓦屋町の家屋敷を購入し、<sup>19</sup>それ以降両替関係の摺物に高津坂の下ないし南瓦屋町四丁目という上町南部の高津宮の門前の居所とともに載る。高津宮は上町南部の高台にある神社であったが、大坂観光の出発地としても知られた繁華地であった。勘兵衛は現在わかっている限りでは最も古くから本両替を営業している錢屋佐兵衛の別家である。本家佐兵衛と同じ島之内組に所属し、寛政十二年頃には三代佐兵衛の代判をつとめるなど有力な別家の一人であった。<sup>20</sup>

文化十年に初代勘兵衛の同家倅の孫兵衛が相続して二代勘兵衛を名乗った。天保五年七月の本家での重要な取り決め、「為後年定置証文之事」<sup>21</sup>にも勘兵衛が別家の一人として署名しているが、同年の

「浪花持丸長者鑑」<sup>22</sup>では勘右衛門名前東の前頭一三五枚目に入り、同種の摺物では天保八年まで勘右衛門で載っている。天保八年十二月に勘治郎が相続して勘兵衛名となっており、三代目と思われるが定かではない。天保七年から十三年にかけて勘兵衛家は所持地を家質において本家から借銀をしているので、<sup>23</sup>なんらかの経済的問題を抱えていた可能性がある。天保十一年十一月の「大阪両替名所附」には錢屋勘兵衛として掲載されるが、天保十四年「大阪両替手形便覧」以降にはでてこない。また天保十四年の御用金も賦課されていないところを見ると、それ以前に本両替を廃業したのではないだろうか。嘉永二年に勘兵衛が病死すると家が断絶し、南瓦屋町四丁目の家屋敷は従兄弟の錢屋宗兵衛が相続した。

**錢屋宗（惣）兵衛** 勘兵衛同様寛政五年から享和期の間に別家したものと考えられ、文化八年には妻帯している。<sup>24</sup>しかし本両替を開業しているのがわかるのは文政五年「大阪両替手形便覧」以降で、幕末まで継続した。開店のきっかけとして文政二年に開始された文政改鑄が考えられる。本町一丁目に店があり、本家と同じ島之内組に属していた。<sup>25</sup>

錢屋佐兵衛の別家のなかでは唯一天保御用金を課せられるなど経済力があつた。特に注目されるのが、河内・摂津嶋下郡などの農村地域の富農らを得意先として活発な取引関係にあつたことである。<sup>26</sup>

また詳細は不明だが、天保九年五月に日田代官寺西藏太役所の大坂掛屋を辞任しており、<sup>27</sup>少なくともそれまでは領主金融にも関わっていたことがわかる。

嘉永三年十一月に何代目かの当主宗兵衛が亡くなったあとしばらく後家みね名前で相続し、その後みねの養子が宗兵衛を相続した。安政六年（一八五九）にはこの宗兵衛と妻ふさと養母みねが同居している。なお本家菩提寺妙徳寺の錢屋佐兵衛墓城には分家・別家の墓も存在するが、宗兵衛家の墓はない。また錢屋佐兵衛の暖簾内で文政三年以降行われた積銀にも参加していない。かなり独立性が高い別家のようにみえる。

**錢屋又（亦）兵衛** 錢佐銀控帳によると、文化五年に元手銀五貫目と出勤料が与えられている。文化十四年の本家佐兵衛への御用金賦課のときには代判人をつとめた。<sup>28</sup>この人物との関係があるかどうかはわからないが、天保八年から十年にかけての「大阪両替手形便覧」に「吉左衛門町亦兵衛」が掲載されている（後述）。ただし天保十一年「大阪両替名所附」にはでてこないの、短期で廃業したと考えられる。その後も又兵衛を名乗る別家は幕末まで継続し、嘉永期には別家市兵衛の幼少の当主の代判をつとめている。

**錢屋林兵衛** 文化八年には妻帯・別宅しているが、<sup>30</sup>錢佐銀控帳によると翌文化九年に佐兵衛から五貫目の元手銀を与えられている。文

化末年の「大坂両替屋所附」では島之内堺筋、文政五年「大阪両替手形便覧」では清水町堺筋として出てくる。その後転居したらしく、文政七年から十一年までの「大阪両替手形便覧」では油町一丁目になっている。文政九年正月前後に休店したとみられ、天保五年段階では別家に連なっているが、天保十二年の別家の書き上げには名前が見えなくなっている。<sup>32</sup>

**錢屋源兵衛** 江戸時代には逸身を名乗り、錢屋佐兵衛の親類筋の別家と考えられる。初代源兵衛は文化四年に亡くなったが、その娘ひさが婿養子として二代目源兵衛を迎え、錢佐銀控帳によれば文化九年に錢屋佐兵衛から両人に銀一五〇貫目という破格の元手銀が渡されており、通常の奉公人別家とは異なる。

本両替としては文政改鑄後の文政五年「大阪両替手形便覧」以降に備後町四丁目ないし備後町堺筋の住所とともにでてくる。文政改鑄後の好況期に本両替を開業したのは宗兵衛と同様である。

また各種調達講など領主金融への関わりが注目される。文政七年八月付の辻六郎左衛門の無尽仕法帳(十年・六〇人の取退無尽)に「世話方之もの備後町三丁目錢屋源兵衛」とあり、もう一口同様の無尽の世話もしていたとされる。辻は当時大和五条代官であった。また文政十一年四月の赤木屋敷勘定元(辻富次郎名前) 無尽など辻富次郎の無尽三件に世話方の一人として加わっているが、こちらは居所

が南瓦屋町になっている。南瓦屋町は錢屋勘兵衛ないし錢屋市兵衛の子供清吉の居所でもあり、何らかの関係があった可能性があるがわからない。

これらの無尽は大塩平八郎が文政十二年十二月から内調し、天保元年に老中に宛て不正な無尽として摘発しているものである。<sup>33</sup> 領主への調達講であるが、籤を使って落札した者はその後掛銀を免除される取退無尽であり、くち性が高い、あるいは講元が幕府規定の利子制限をはるかにみえる高利潤を獲得していることが不正とされるゆえンである。それに関連して仲介を行っていた大坂町奉行所の与力弓削新左衛門は自殺させられた。その手下として無尽の取組を多数行っていた新町の八百屋新蔵も獄門となっている。<sup>34</sup>

これらの領主が調達を目的として行った無尽は、大名貸の利率が下がり、大名側からの断りのリスクも高まった状況に依じて編み出された調達手段として、江戸後期には名目銀にならんで上方で多数行われていた。海保青陵は大坂には銀主を集めて講を取り立てる「至極ナレテ巧者ナル人」がおり、「銀主モツマル処、損金ヲスルコトナキ理ユヘニ、金モ出シヨキ也」(「稽古談」)<sup>35</sup>と評価した。筆者はこうした講の取立人として干鯛仲買の近江屋長兵衛を取り上げたことがあるが、錢屋源兵衛もそうした一人だったのである。<sup>36</sup>

この事件では無尽以外の不正行為が表面化しており、八百屋を除

いて無尽を取り組んだ者が処罰されたかどうかは不明である。<sup>37</sup>しかし水野忠邦のために取り組まれていた無尽が途中で取りやめられているように、多くの無尽が停止されたと思われる。錢屋源兵衛の取り組んだ無尽の処理がどのように行われたかわからないが、天保期の錢屋源兵衛の経営難の一因となった可能性がある。

天保期には錢屋源兵衛は本家から借り入れをしている。<sup>38</sup>また天保の御用金の際の錢屋佐一郎の申し立てによると、「佐一郎店之儀ハ錢屋源兵衛相続仕来候所、段々不如意ニ罷成取続六ヶ敷候上、去ル七ヶ年以前酉年大火之節類焼仕、必至与差支、無拋本家佐兵衛方相頼、六ヶ年以前佐一郎名前ニ改相続者仕候得共」と、源兵衛は経営困難となっていたところを大塩の乱で類焼したことから困窮し、本家に頼んで佐一郎に店を譲ったことがわかる。天保八年末には備後町四丁目の両替店は佐兵衛分家の佐一郎名義となり、源兵衛は中船場町に転居し、両替商売は廃止している。

以上から錢屋佐兵衛の暖簾内の本両替の特徴をまとめておく。まず本家同様大坂南部の島之内・南船場または南上町に立地していることがあげられる。従来本両替が多かったのは船場北部で、特に古くからの本両替は今橋通周辺に位置するが、錢屋佐兵衛の暖簾内は後発の両替商として、小売商が多い大坂南部の寺社・芝居小屋の近くを商売の基盤として選んでいる。

本両替の奉公人の開業が本家と小組の承認を要したことから、本両替仲間の小組では本家と同じ島之内組に属した。文化十年頃の嶋之内組に所属する九人の内、佐兵衛と本家の弥助を除く七人の内、勘兵衛・市兵衛・清吉・林兵衛といった佐兵衛の暖簾内がいる。<sup>40</sup>本両替の小組は当時一六組あったが、その一組は錢屋佐兵衛の勢力範囲であったといえるだろう。

また別家本両替が創出された時期は二代佐兵衛の代と三代佐兵衛代前半である。ただ宗兵衛・源兵衛は別家直後ではなく文政改鑄後に本両替になるなど、別家即本両替開業でない。市況をにらんで、経営が成り立つとの判断のもと本両替を開業したと思われる。しかし佐兵衛の分・別家は佐一郎を除いて中堅の本両替であるが、宗兵衛をのぞいて本両替を長く継続することはできず短命であった。その曲がり角は文政後半から天保期にある。次章では、錢屋市兵衛を例に、その経営動向を分析して、破綻の理由を考えてみたい。

## 二 別家錢屋(中西) 市兵衛の経営

本章では錢屋市兵衛の経営史料である銀控帳や両替取引証文を検討し、開店から休店にいたるまでの経営の推移を検討する。

### ① 錢屋の銀控帳の性格

逸身家文書のなかには錢屋佐兵衛・佐一郎・錢屋市兵衛の銀控帳

があり、記載形式はほぼ共通している。銀控帳は本両替店の帳簿で、毎年年末に一ヶ年の収支を計算して延銀(純益)を算出し、それを年初の有銀に加えて次年初の有銀(資本)を定めている。奉公人の人件費や世帯方入用などの主要な費用は銀控帳のなかで支出されている。商業金融の担い手である本両替としての本質にかかわる決算帳簿であり、重要な帳簿として本両替廃業後も保管されてきたと考えられる。

錢屋佐兵衛家では、領主金融や家屋敷経営に関しては別に帳簿が作成されている。領主金融や家屋敷経営も含めた経営全体をとらえようという試みは、「大算用」<sup>41</sup>という帳簿でなされているものの、下書式的で銀控帳ほど整えられていない。また錢屋市兵衛家関連の帳簿として残されているのは、唯一、銀控帳(錢市銀控帳と略記)<sup>42</sup>だけである。

錢市銀控帳の形式は本家錢佐銀控帳にならっているが、相違点もある。たとえば所持借屋の家賃収入は錢佐銀控帳には記されないが、錢市銀控帳では所持借屋の家賃収入が時々記される。もつともこれは後述するように、市兵衛が石灰町に転居した後しばらくだけ久左衛門町の屋敷から家賃収入があっただけで、額も少なかったためだろう。

また「算用帳」という佐兵衛にない市兵衛独自の収入項目があり、

後に述べるような状況からみて、領主金融からの収入と考えたい。これも少額なので、本家か他家の大名貸か無尽への加入出資ではないだろうか。

また錢市銀控帳では、享和三年(一八〇三)正月に「享和二年戌大算用」と前年の決算である旨が記されるようになり、しばらくこの大算用という言葉が使用される。大算用が錢屋佐兵衛同様の経営統括行為を示すとすれば、錢市銀控帳は錢佐銀控帳と異なり、商業金融・領主財政・家屋敷経営を含む経営全体の決算帳簿ということになる。

## ②初代錢屋市兵衛の本両替開店

次に錢屋市兵衛の本両替開業を錢市銀控帳から検討する。この「銀控帳」の表紙には寛政十年(一七九八)正月と記されているが、内部の書き始めは以下の通りである。

寛政七卯年八月吉日

十二日店開

一 五貫目 本家元手銀也

内六百五拾貳匁

錢武殿

五分一り

惣勘定

不足銀引

一 貳百六拾八匁五分五厘

一 壹貫七百壹匁八り

一、壺貫五百四拾六匁六分六り

三貫五百十六匁貳分九厘

内三貫六百四拾九匁五分九り

世帶入用

内三百七拾三匁分五り

損銀也  
作兵衛

定介・与兵衛

綿伊八・岸源

右引残り三貫八百四十一匁四厘

寛政八辰年

一四貫八百八拾貳匁四分八り

利銀

一 壹貫拾五匁八分八り

小判利

一四貫百廿三匁八分一り

錢利

一 九百拾壹匁九分五り

算用帳

×拾貫九百卅四匁貳分貳り

内四貫六百七拾匁七分貳り

世帶諸入用

内四百六拾貳匁五分三り

損銀高

右引残り五貫八百目八分七り



図1 菊屋町の銭屋市兵衛・大和屋利助の店の位置

すなわち錢屋市兵衛は本家である錢屋佐兵衛（二代、寛政八年五

月没）から寛政七年に銀五貫目を元手銀として受け取っているがそこから錢武こと錢屋武兵衛の損失が引かれて、開業当初の有銀（資本）は四貫三四七匁四分九厘であつた。錢屋武兵衛も錢屋佐兵衛の別家であり、市兵衛が本両替を開業した菊屋町の店舗はもと錢屋武兵衛の店であつた。

この経緯を菊屋町の宗旨人別帳により検討する。寛政六年の人別帳によると、<sup>43</sup> 同年三月石灰町銭屋佐兵衛方から銭屋武兵衛・養子市

太郎・下人作兵衛・同定助が菊屋町の借屋（富田屋彦兵衛支配・谷町二丁目麴屋源兵衛所持）に引っ越してきた。銭屋武兵衛が別家して、大坂南部の島之内にある菊屋町の借屋で本両替の店を出したのである。寛政十年の菊屋町の水帳<sup>44</sup>によれば、店は長堀にかかる心斎橋から、南の道頓堀の戎橋へとぬける心斎橋筋と、西の久左衛門町への通りの角にある表口七間・裏行二〇間の表借屋である（図1参照）。

ところが翌寛政七年五月に武兵衛が病死すると、八月に銭屋佐兵衛方から銭屋市兵衛が移ってくる。「大坂菊屋町宗旨人別帳」には、この間の事情が次のように記されている。

法花宗生玉筋中寺町  
一妙徳寺旦那

銭屋武兵衛

子 市太郎

下人作兵衛

同 定助

べ四人

一 銭屋武兵衛儀当五月病死仕跡相続相成相残ル諸図不残并下人  
定助共石灰町銭屋佐兵衛方へ引取ニ罷成申候以上

卯八月

家守清水屋宇兵衛

※貼紙A

（内容省略…中川注）

法花宗生玉筋中寺町

一妙徳寺旦那

銭屋市兵衛

下人惣助

同 定助

べ三人

※貼紙B

（内容省略…中川注）

右市兵衛人別之通石灰町銭屋佐兵衛方へ移住仕候以上

家守清水屋宇兵衛

（寛政七年…中川注）

卯八月

なお貼紙Aには、武兵衛の子の市太郎はもとも養子であったのが不縁になり、卯三月に実親の摂津池田村あわんど（阿波堂）町脇坂玄京方に引き取られたこと、武兵衛の下人作兵衛は卯七月に家出したことが記されている。貼紙Bには、市兵衛が寛政七年八月に下人与三吉、九月に与兵衛を抱えたことが記されている。

これからわかるのは、寛政七年五月に銭屋武兵衛が病死し、残さ

れた諸物と下人定助は八月に本家佐兵衛に引き取られたが、入れ替わりに佐兵衛から市兵衛と下人定助・惣助が引越してきたということである。武兵衛死後、店と下人定助はそのままで、市兵衛が新しい主人として佐兵衛から送り込まれたと考えるのが自然であろう。<sup>45</sup> すなわち本家佐兵衛の意向のもと、市兵衛が武兵衛の借屋や家財、奉公人に加え本両替としての得意先や債権・債務まで含む経営全体を相続したとみられる。そのため、市兵衛は元手銀から本家が負担していた武兵衛の損失分を補填したのではないだろうか。

このような暖簾内での本両替店の相続は、すでに述べたように銭屋源兵衛・佐一郎の間でも行われている。両者は得意先の判鑑帳を継続して使い、源兵衛がしばらく佐一郎のもとで働くことでスムーズな移行をはかっていた。「大阪昔時の信用制度」<sup>46</sup>では、両替商の慣習として「而して別家の主人死去する時は本家より其遺族を給養し、又店の者を取立て、別家の後嗣ぎと為す事あり。」とあり、こうしたことが特異ではなかったことを示している。

こうした暖簾内での入れ替え相続は、絶家の危機から暖簾内を保つためだけでなく、本両替商売上からも意味があったと思われる。本両替の収入源は得意先であり、得意先の確保には地縁的かつ継続的な信頼形成が大切であった。既存の本両替の店や帳簿、奉公人をそのまま引き継ぐことで、それがある程度可能となったと考え

られる。また本両替の店には穴蔵など特殊な設備や店構えが必要であったことも、影響していると思われる。

なお銭屋武兵衛、ついで市兵衛が開業した菊屋町は、島之内の南部で、この時期には食品関係・呉服・小間物関係などの小売店が増え、独自の繁華地化をとり、借屋人の六割が奉公人を持つなど上昇・安定化したといわれている。<sup>47</sup> こうした繁華地の小売商や往来客を客として本両替の経営が成り立つ余地があり、銭屋武兵衛・市兵衛の開業に結びついたと思われる。

## ② 銭屋市兵衛の両替取引証文の性格

本両替は得意先から金銀銭・手形などを無利子で預かり、貨幣両替や振手形などの手形の発行、為替取り組みなどのサービスを提供した。こうした両替取引開始に際しては証文が取り交わされた。

逸身家文書の内には、初代市兵衛家の文化三年（一八〇六）から四代の嘉永元年（一八四八）におよぶ両替取引一札之事「一札」といった両替取引証文が四〇通弱残されている。表1にこれらを整理した。もちろんこれは市兵衛家の取引の全体を示すものではなく、なんらかの故障を生じたものが残されたにすぎない。以下は、初代銭屋市兵衛の両替取引開始時の証文の一例（表1の⑦）である。



## 江戸後期の両替替経営について（中 川）

表 1 銭屋市兵衛の両替取引証文

	両替取引名前	両替取引印形人	年月	証文名と日歩	遡身家文書番号	注 記
①	綿屋武兵衛	橘屋権次郎、山城屋治兵衛	文化 3 年正月	両替取引一札之事	3-43-8-20	
②	大和屋利兵衛	川崎屋武左衛門	文化 5 年12月	同上	3-43-8-22	
③	明石屋利助	奈良屋多助	文化 6 年正月	同上	3-35-9	天保14年の預銀証文端裏書によれば明石屋家出行方不明
④	越前屋長兵衛	越前屋勘次郎幼少ニ付代判伊兵衛	文化 6 年正月	同上	3-43-8-21	
⑤	播磨屋市郎兵衛	大和屋清助、釘屋喜兵衛	文化 6 年 4 月	同上	3-43-8-25	
⑥	山田屋宇兵衛	大坂屋清兵衛	文化 6 年 7 月	同上	3-43-8-17	
⑦	大和屋利助	大和屋利八、忖武兵衛、大和屋力松代判利八、播磨屋佐兵衛	文化 8 年 9 月	同上	3-43-8-18	
⑧	大和屋利八	忖武兵衛、大和屋利助、大和屋力松代判利八、播磨屋佐兵衛	文化 8 年 9 月	同上	3-43-8-19	
⑨	半田屋庄兵衛	播磨屋弥助、姫路屋次兵衛	文化 9 年 3 月	同上	3-43-8-24	
⑩	播磨屋庄八代判喜兵衛	住吉屋八右衛門	文化10年閏11月	同上	3-43-8-23	
⑪	天満屋太右衛門	袴屋嘉兵衛	文化11年 4 月	一札 日廻し銀1貫目につき（数値未記入）	3-35-17	
⑫	山田屋吉次郎	山田屋治兵衛	文化12年 9 月	同上	3-43-8-6	
⑬	紙屋源兵衛	立野屋卯兵衛	文化14年 3 月	一札 日廻し銀1貫目につき5分	3-43-8-2	
⑭	河内屋儀助		文政 4 年正月	一札 中芝居勘定場	3-43-8-7	
⑮	豊嶋屋仁七郎	阿波屋藤七	文政 5 年正月	一札 日廻し銀1貫目につき5分	3-43-8-9	
⑯	住吉屋藤吉	住吉屋伊兵衛	文政 5 年 5 月	同上	3-43-8-3	
⑰	紀伊国屋伊兵衛・播磨屋林兵衛・泉屋庄太郎		文政 6 年 8 月	同上	3-35-18	
⑱	備前屋武助	木綿屋利兵衛、大坂屋利兵衛	文政 7 年 5 月	同上	3-35-16	木綿屋利兵衛は天下茶屋の人。後に銭源・佐一郎判鑑帳に印あり
⑲	播磨屋伝蔵	播磨屋伝兵衛、播磨屋文蔵	文政 9 年12月	同上	3-43-8-8	
⑳	平野屋林兵衛	丸屋平兵衛	文政10年正月	同上	3-43-8-28	
㉑	高知屋六兵衛	虎屋権兵衛	文政10年 5 月	同上	3-43-8-26	
㉒	播磨屋音七	播磨屋文蔵、播磨屋伝兵衛	文政11年 9 月	同上	3-43-8-5	天保 6 年借銀証文あり
㉓	粉川屋吉兵衛	奈良屋伊八	文政11年11月	同上	3-43-8-1	
㉔	大平寺屋佐兵衛	和泉屋亀助	天保 3 年11月	一札 日廻し銀1貫目につき3分	3-43-8-4	
㉕	堺屋新太郎（振出手形は田中屋新太郎）	富田屋仁兵衛代判新兵衛	天保 4 年 2 月	一札 日廻し銀1貫目につき5分	3-43-8-27	
㉖	大坂屋藤兵衛	河内屋庄助	天保 6 年 5 月	同上	3-35-6	河内屋庄助は後に銭源・佐一郎判鑑帳に印あり
㉗	越前屋亀松	越前屋長兵衛	天保 6 年 5 月	同上	3-35-31	
㉘	越前屋長兵衛	越前屋亀松	天保 6 年12月	同上	3-35-2	
㉙	宮崎屋久吉（振出手形は丹後屋弥三兵衛名義）		天保 7 年 6 月	一札	3-35-8	
㉚	上田屋楠太郎代判与三兵衛	越後屋与三兵衛	天保 8 年10月	一札 日廻し銀1貫目につき5分	3-35-5	越後屋与三兵衛、後に銭源・佐一郎判鑑帳に印あり
㉛	倉橋屋伊右衛門	倉橋屋伊兵衛	天保10年10月	一札 日廻し銀1貫目につき（数値未記入）	3-35-25	
㉜	刀屋安兵衛	銭屋弥助	天保13年 9 月	同上	3-36-7	
㉝	木ノ本屋佐兵衛	平野屋元次郎	天保15年正月	同上	3-35-1	
㉞	住吉屋甚兵衛	住吉屋金兵衛	弘化 2 年 6 月	同上	3-35-29	
㉟	平野屋直輔	池田屋清兵衛	弘化3年4月	同上	3-35-3	
㊱	大和屋留吉代判弥兵衛	鉛屋卯兵衛	嘉永元年11月	同上	3-35-4	嘉永元年以降大和屋留吉家出、鉛屋安治郎身体限り

## 両替取引一札之事

一、我々中江大和屋利助者人名前金銀錢之通帳を以御取引可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候、右通帳を以銀子借用ニ相成候ハ、我々中江借用申処実証也、然ル上通表借用ニ相成候節、其元御入用ニ御座候ハ、我々中江急度相渡可<sub>レ</sub>申候、万一印形人之内差支有<sub>レ</sub>之候ハ、相残ル印形之者元利不<sub>レ</sub>残返済可<sub>レ</sub>申候、尤通帳紛失仕候者、其元殿控帳面之通り無<sub>ニ</sub>相違<sub>一</sub>勘定可<sub>レ</sub>仕候、勿論通帳者年々相改り候得共、御取引被<sub>レ</sub>下候内者、此一札幾年ニ而<sub>ニ</sub>茂<sub>一</sub>御用イ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>成候為<sub>ニ</sub>後日<sub>一</sub>之両替取引我々連印一札仍<sub>ニ</sub>而<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>件

大和屋利助（印）

文化八年辛未九月

大和屋利八（印）

倅 武兵衛（印）

大和屋力松（印）

代判利八（印）

播磨屋佐兵衛（印）

錢屋市兵衛殿

この証文を差出した印形人は大和屋利助・同利八と倅武兵衛・同大和屋力松（代判利八）・播磨屋佐兵衛の五人である。金銀錢之通帳の名前人は大和屋利助であるが、両替取引の契約者は複数である。

同年の菊屋町の宗旨人別帳によると大和屋利助は菊屋町の家持町人であるが、大和屋利八・力松・播磨屋佐兵衛は彼の同居人でも菊屋町の町人でもない。興味深いのは表1の⑧に、同時期に印形人は同じであるが、大和屋利八を金銀錢之通帳の名前人とした両替取引証文が存在することである。五人が錢屋市兵衛と両替取引を始めたが、金銀錢之通帳や振手形の名前人になるのは大和屋利助と同利八であるということである。

表1をみる限り、名前人が単独で印形人になっているのは少し特殊な⑭と⑲しかない。特に文化十一年以降の「一札」には、証文の文面に日歩の記載が始まるとともに、「然上者通表手尻勘定何程借用ニ相成候共、通帳名前人之外者請負人<sub>与</sub>異変之儀決而不<sub>レ</sub>申」（表1の⑳）と、名前人の他の印形人も請負人すなわち単なる保証人ではないという趣旨の文言がわざわざ記載されている。また表1の⑰のように、一人が名前人となるのではなく三人連名で両替取引をしているケースもある。錢屋市兵衛の場合、単独での両替取引を全くしていなかったかどうかはわからないが、複数での取引が多かったことは想像できる。

その理由についていくつか提起しておく。一つは商人の暖簾内、あるいは仲間や組合との取引である。表1の⑲の播磨屋伝蔵は天保三年刊「商人買物独案内」<sup>48</sup>によると四つ橋のキセル屋であるが、印

形人の播磨屋文蔵とともに江戸為替を取り組み、おそらく商品代金と思われる金を受け取っている。<sup>49</sup> ⑰の連名人の内紀伊国屋伊助と播磨屋林兵衛も「商人買物独案内」から四つ橋のきせる屋であることが確認できる。本両替の米屋喜兵衛の例でも、享和二年(一八〇二)・文化五年に兵庫生魚問屋仲間の「組合」と両替取引を行い、一人が惣代として名前になった<sup>50</sup>。商人が共同して遠隔地から商品代を取り立てたり、同一の両替屋の口座間で資金を振り替える便宜は大きいだろう。<sup>51</sup>

次に両替取引開始にあたって、相手の信用度が低いために銭屋市兵衛が名前以外に印形者を求めた可能性を考えなくてはならない。両替取引上の債権、すなわち当座預金以上の振手形の過振や引き出しから生じる債務は後述するように恒常的であった。竹川彦太郎の大坂本両替店の文政三年「店定之事」でも得意先との取引について「尤取引之始入一札下書之通証人相立取置可申事」とあり、両替取引開始に際して保証人を取るべきだとされている。<sup>52</sup> 両替取引の場合、金銀銭取引通上の出入は流動的で債権を確定することが難しいことから、本来保証人であるべき者も印形人として連名させたのではないだろうか。先に挙げた文化十一年以降の「一札」の文言そのものが、名前以外に印形人が保証人だと主張して債務を逃れようとする可能性があったことを示唆する。

これを裏付けるものとして、表1の⑨がある。名前人半田屋庄兵衛はどういう人物かわからないが、他の印形人である姫路屋次兵衛は中之島常安町の船宿、<sup>53</sup> 播磨屋弥助は淀屋橋南詰の播州姫路飛脚、琴平出船所・船宿と推定される。<sup>54</sup> これなどは大坂以外の者が両替取引をするにあたってなじみの船宿に保証してもらったのではないだろうか。また表1の⑫も、銭屋佐兵衛の自家銭屋弥助が印形人になっていることが興味深い。これは弥助が自分の得意先を市兵衛に紹介するにあたって印形人となったと考えられる。<sup>55</sup>

表1の両替取引証文の印形人については、居住町や職種が記されないために、その正体がほとんどわからない。大和屋利助や四つ橋のきせる屋など近隣の者が多いようだが、皆が大商人とはいえないようである。同時期の買物案内や長者番付などに出てくる者はほとんどなく、銭屋佐一郎の得意先のような各種問屋や道修町薬種中買や干鰯仲買などは含まれていない。<sup>56</sup> 表1以外でも得意先とわかる者のなかには借屋人もいる。<sup>57</sup> そうした得意先の経営の危うさもあって、両替取引にあたって名前人単独ではなく複数の印形人を立てたのではないだろうか。

なお先にあげた大和屋利助は菊屋町の両替商で、本両替ではないが、文化四年から七年の「両替手形便覧」にも掲載される大手の銭両替である。銭両替は本両替の得意先となり本両替の金融システム

に組み込まれているが、その一例として注目される。少し詳しくみておこう。

大和屋利助は、寛政十年九月に南堀江三丁目の大和屋嘉助方より菊屋町に移住し借宅した。大和屋嘉助から分家ないし別家したのである。大和屋嘉助も高台橋南詰として両替手形便覧に載り、本両替ではないが大手の銭両替と考えられる商人である。菊屋町の宗旨人別帳によると、大和屋利助は享和三年に家持となり、文化期に下人の数を二人から五人程度に増やし、経営を拡大したとみられるが、その時期に同町内の銭屋市兵衛の得意先となっている。文化八年の大和屋利助家は妻と子供三人に加え、下人五人・乳母一人・下女一人の十二人世帯である。このとき銭屋市兵衛は家族三人に下人三人・下女一人の八人世帯で、奉公人数は大和屋利助が上回る。

ところが大和屋利助家で文政五年（一八二二）に代替わりがあり、同十年三月に先代が没すると、両替取引残銀や預けた貨幣の取り込み事件をおこして菊屋町内や近隣の得意先に出訴された。出訴の段階で、大和屋は菊屋町内に下人十一人をかかえる小倉屋平右衛門（小倉油で有名な小間物商）をはじめ家持四人、家守一人、借屋人五人を得意先として持ち、隣の木挽町などにも得意先を拡げていた。しかし大和屋はおそらく代替わりをきっかけとした危機を乗り越えられず、得意先に一部を弁償することで内済はした

ものの、同年八月には菊屋町の家屋敷を売り払い順慶町の借屋に転居し、銭両替も廃業した。このとき銭屋市兵衛はすでに菊屋町にはおらず、大和屋の得意先らの訴訟には加わっていないようだが、大和屋利助らの両替取引証文が残っていることから、損失を蒙った可能性がある。

なお本両替が得意先に対して当座預金をどれだけ上回る振手形の発行を許すかという限度額については、表1の両替取引証文には記されていない。竹川彦太郎の大坂本両替店では過振は滞ることが多いとして得意先の分限に応じた限度額を定めて運用することを決めていたが、最初からこれまでと決めて得意先に通告するわけではなかったようである。「大阪昔時の信用制度」<sup>60</sup>では、両替取引は代々継続することが多く、「一片の書面又は口諾に依りて過振を承諾し、別に證處物を徴せず、過振及資金に對しては擔保を徴する事無く」としている。

また過振など貸し越しにつく日歩についても、表1の①から⑩までの両替取引証文にはふれられていない。文化十一年の「一札」（表1の⑪）から具体的な利率は未記入であるが「日廻し」（日歩）の文言が入る。文化十四年三月の「一札」（表1の⑬）から天保八年十月の一札（表1の⑳）まで、ほとんど「日廻し」「一貫目につき五分、すなわち〇、〇五パーセント、月利一、五パーセントの利率である。

例外は表1の②の一札で、日歩は〇、〇三パーセントである。二代目から三代目にかけて銭屋市兵衛の日歩はおおむね安定的で、その水準は天保期(一八三〇～四四)から弘化期(一八四四～四八)頃の記事と考えられる「守貞漫稿」で日歩は銀一貫目につき五歩と記されているのと合致している。元文元年以降幕府は年利一五パーセント以下に利子を制限したが、日歩は年利に直せば制限を上回る高利であることが注目される。

文政二年六月に金相場下落により日歩の利率が上昇した例があり、<sup>61)</sup>日歩は変動するものであった。銀目での当座貸付であるため、銀の相場に左右されるのは理解できるが、そうすると文化末以降の日歩の安定はどういうことなのか。幕府が物価引き下げのため日歩の制限を試み、その対応として両替仲間で限度額を定めたということが考えられる。また表1の③以降両替取引証文に日歩の記入がなくなるのは天保改革の影響であろう。天保十三年(一八四二)には物価引き下げ令と制限利子の引き下げ(年利一二パーセントに引き下げられた)により、両替仲間では日歩を三～五分から二～四分に引き下げざるをえなかった。しかし暮れの節季には、それでは誰も貸す両替がないと危惧されたことから、一時的に五分に引き上げてもよいと仲間内で内々で定めているのである。<sup>62)</sup>

なお両替取引における貸し出し超過分の滞りは、初代市兵衛が開

業してすぐ生じている。先にあげた銭市銀控帳の寛政七年の項にある損銀の内綿伊八・岸源とあるのは両替取引の滞りであろう。貸し出し超過は日歩の対象となるだけで滞りではないが、得意先がそれを補填できなかったり、店をたたんだり、破産すると滞りとなる。その際両替側は振手形の発行停止などの取引停止の措置をとったはずであるが、滞りがすぐに損銀として処理されるとは限らない。取引状況や返済の見込みに応じて処理されたと考えられる。また損銀として銀控帳から一旦支出されても、別の帳簿に移されて対談や訴訟により回収が図られたとみられる。一般の借銀証文に付け替えられた場合もあった。しかし表1の③の明石屋利助は最終的に行方不明となり、③の大和屋留吉は家出、鉛屋卯兵衛の係累とみられる安治郎も身体限りとなっている。このように、滞りが回収されないまま残ったものも多いと考えられる。

「大阪昔時の信用制度」<sup>63)</sup>では、「両替が商人に信用を與ふる事此の如きが故に、商人の方に在りても非常に信用を重んじ、決して不渡を為すが如き事無く、過振に對しても必ず之を償却し、約束を違ふるは皆無と云ふも大過無き状況なりき」、「両替が得意の為に損害を蒙むる事の殆ど皆無なりしは、全く其選擇を慎みしに由れり。」などと記される。本両替は得意先を厳選し、得意先も手形不渡りを出すようなことはほとんどなかったということであるが、少なくとも

銭屋市兵衛のような近世後期中堅どころの本両替の経営では、印形人を複数として保険をかけても、必ずしも安定的とはいえなかったことは明らかである。

### ③ 初代市兵衛の経営（文化八年）

初代銭屋市兵衛は寛政七年に開店したあと、奉公人を二人雇い、十一月に女房とわを戎島町淡路屋弥兵衛から迎えた。<sup>64</sup> 寛政十年五月には娘いわが出生し、同年八月には今橋一丁目の紀伊国屋伊兵衛方から養子大吉を迎えた。享和二年十一月にとわが亡くなると、翌年正月にとわの実家からたけを後妻に迎えた。同年十月に実子の清吉が出生したが、なぜか文化二年閏八月に南瓦屋町播磨屋仙太郎借屋に幼少の息子だけを別宅させている。<sup>65</sup> この銭屋清吉は文化十年前後には本両替仲間島之内組に所属し、幼少のため代判人に林兵衛が立っているが、<sup>66</sup> 実際に本両替を営業していたか、本当に親と別居したかは確認できない。

市兵衛が別家したのは本家の二代佐兵衛の最晩年である。三代佐兵衛は寛政八年に相続したが、まだ一四歳と幼少であったため実質的には暖簾内のバックアップのもと経営が行われただろう。寛政十二年夏に両替騒動が起こった際には佐兵衛は病身として代判を別家勘兵衛が勤めていたが、市兵衛も佐兵衛代として家賃証文を引宛に借り入れをした受取書を出すなど本家の用をつとめている。<sup>67</sup>

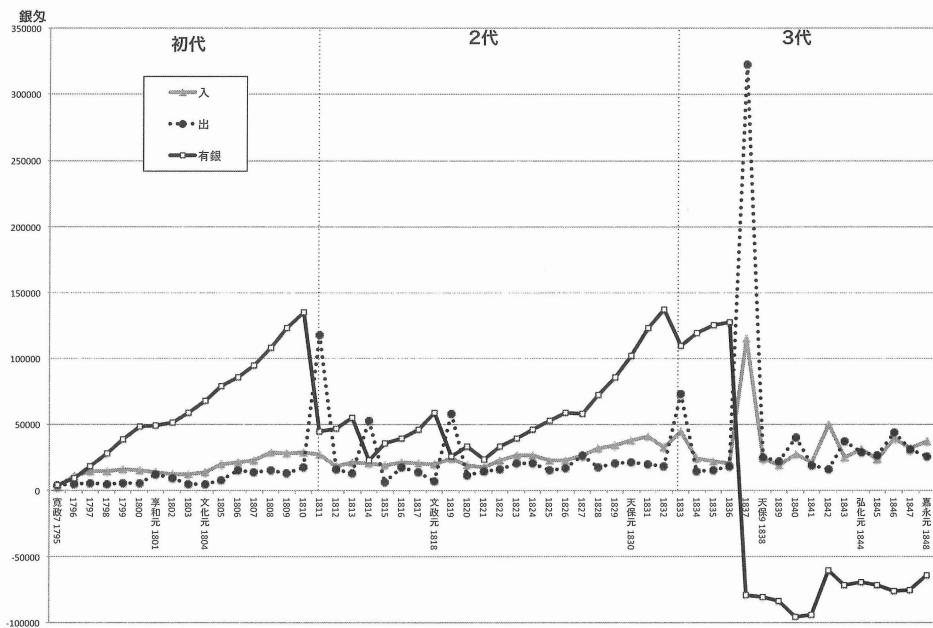


図2 銭屋市兵衛「銀控帳」の収支と有銀

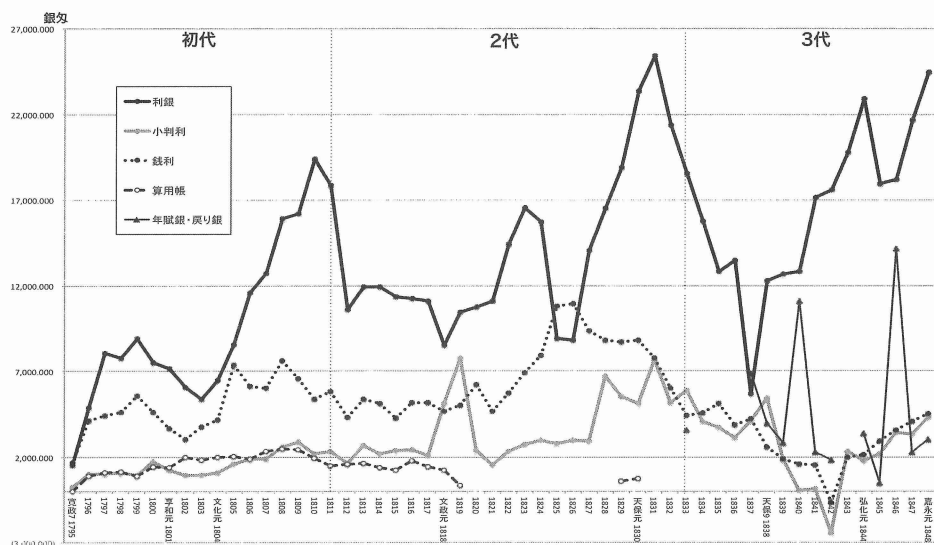


図3 銭屋市兵衛「銀控帳」の収入項目別動向

銭市銀控帳から初代市兵衛の経営を検討しよう。図2は各年の収入と支出、そして有銀の額を表示したものである。収入総額は開業してから文化元年まで漸増し、文化二年に銀一九貫目を超え、それ以降は二〇貫目をこえる年がほとんどである。支出も次第に増加するものの、文化までは五、六貫目、それ以降は一〇〜一七貫目で、収入を上回ることはない。そのため有銀に毎年の延銀（純益）が加えられて順調に伸びている。初代市兵衛の代、有銀は開業から文化七年末までの一五ヶ年で三二倍に増加した。

初代市兵衛の代の主な収入は、図3からわかるように、利銀・小利銀・銭利・算用帳である。各々について検討しておこう。

利銀は貸付の利息であり、振手形の過振などによる通帳上の借し越しにつく日歩が本来的なものである。ただ先述したように両替取引の滞りは借銀証文に付け替えられる場合があり、その他に証文貸もなかったとはいえない。二代市兵衛相続前の大吉やその義母だけが町人相手に貸付をした証文が残っている<sup>68</sup>。銭屋市兵衛家では少なくとも当主以外の家族の証文貸であるが、その利潤が市兵衛家の本両替経営に帰したかどうかは不明である。

図3からも明らかにように、市兵衛家の収入として最も重要なのは利銀である。これは得意先への貸付額に対応するから、得意先の多さや得意先の商業活動の活発さを表している。初代市兵衛の代で

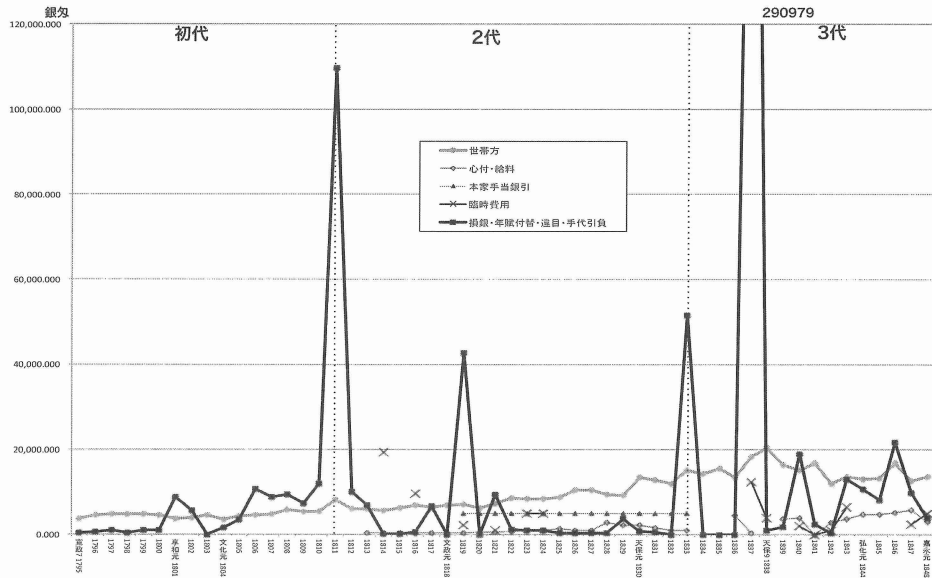


図4 銭屋市兵衛「銀控帳」の支出項目別動向

は享和から文化初にかけて一時的に落ち込むが、その後は急激に伸びていき、文化七年には銀一九貫目をこえる。

小判の利・銭の利は貨幣両替の利益である。銭市銀控帳によれば、天保八年に「年来小売徳除置分付出」として銀四貫目弱が収入に加えられているので、銀控帳に毎年記されている銭利は、店先での現物貨幣の両替（小売）ではなく、金相場所での仲間内取引や得意先相手の貨幣両替の利益と考えられる。

とりわけ銭利は初代市兵衛にとって、利銀につぐ重要な収入源である。銭相場は当時安値で安定しており、相場変動で大きな利潤を獲得できるような状況にはない。従って銭利の多さは、初代市兵衛の得意先が銭を商品代や賃銭として取り扱うことの多い小売商や銭屋であったためと考える。また図3からわかるように、銭利は享和から文化初に落ち込みその後回復するという、利銀とよく似た動きをしている。利銀が得意先との両替取引の規模を表すとなると、銭の扱い高も同じような動きをするのは納得できる。小判利も次第に増加するが、銭利にははるかに及ばない。

算用帳とされる収入は本両替開業の年にはないが、翌八年に銀九八一匁余が計上され、漸増して、文化期に銀二貫目を超える。収入全体にしめる割合は少ないが、安定している。先述したように領主金融からの収入と考えておく。



次に支出を検討する。図4に支出の主要項目の推移をあらわした。

主要な支出項目には、世帯方、奉公人への心付・給料、本家手当銀引(積銀)、損銀・年賦付替・違目手代引負などの店方の損失があり、臨時に家屋敷購入や家族の冠婚葬祭費用や伊勢参宮費用、幕府御用金などの費用も計上されている。通常の年の支出は世帯方入用と損銀がほとんどを占める。損銀は開業当初からあり、寛政九年には「播万ニセ手形・木津孫太郎当座帳引残り損」一貫九六匁余、翌十年には「金銀算用不足、廿二匁文盜賊合、其外得意方少々損銀引」三三二匁余が支出されている。損銀のなかには勘定が合わないことや偽手形や盗賊にあつた損失もあるが、多くは得意先との両替取引の滞りである。寛政十一・十二年には損銀を出した得意先の名前が略記されるが、享和期以降は損銀額が増えたためか、べ高のみが記されるようになった。

#### ④二代市兵衛の経営(〜天保四年)

初代市兵衛は文化八年九月に病死し、養子の大吉が市兵衛と改名して相続した。翌九年義妹のいわがときと改名して女房となつていたので、おそらく初代からの既定の方針として二代市兵衛が婿養子としてあとを継いだことになる。文化十年には当時石灰町の錢屋佐兵衛の借屋人であつた義弟清吉が引き取られ、これ以降原則として同居した。逸身家文書のなかには、文化十年十二月から文政二年二

月まで清吉、文政三年三月から文政七年まで市二(次・治)郎にあつた質物請状・銀預証文が多数残っている。<sup>69)</sup>「銀控帳」には文政四年に市兵衛が義母たけ・妹とめ・市二郎とともに荷持一人をつれて伊勢参宮した費用が計上されており、市二郎は清吉が改名したものと考えられる。

文化十二年八月二十八日に二代市兵衛は菊屋町からすぐ南の久左衛門町において間口四軒半・裏行二〇間の家屋敷を購入し移転した。<sup>70)</sup>久左衛門町は島之内南端、道頓堀北岸に位置する芝居で繁栄した町である。化政期は二代目嵐吉三郎(璃寛)と三代目中村歌右衛門(芝翫)の二大スターのライバル対決もあつて、道頓堀の大芝居が隆盛した。

文政四年正月「一札」によると、市兵衛は中の芝居の関係者とみられる河内屋儀助と両替取引を始めたが、「当時中之芝居勘定場と毎日金銭其元殿江差入」る分は取引通ではなく受取通に入帳し、「万一取引通表銀子借用ニ相成候ハ、別紙受取通ニ差入有之候金銭ヲ以差引勘定」することを取り決めた(表1の⑭)。なぜ帳簿を二重にするかという点、「取引通帳芝居へ遣し置候事難ニ相成」、つまり芝居小屋との両替取引はできないという理由であつた。両替取引においては名義人が必要であるためかもしれないが、惣会所や町会所といった団体と両替取引がなされた例もあるので、<sup>71)</sup>芝居小屋固有の

問題があるのかもしれない。しかし実質的には受取通を介することにより、中の芝居勘定場から金銭が市兵衛方の河内屋儀助の口座に預け入れられている。

文政五年三月河内屋儀助差出・市兵衛宛「返り一札」<sup>72</sup>には、先年より両替取引を頼んで金銀銭之通帳で取引していること、通帳を紛失したので新通帳に付け替えることが記されている。そして文政五年正月十八日から閏正月二十八日まで「仮請取通帳」をもって中の芝居から市兵衛方へ差し入れられた額は、金二両一分、銭六六五貫三一六文であった。多額の金銭、とりわけ銭が中芝居から市兵衛方に預けられていることがわかる。これらは木戸銭などの興業収入とみられる。<sup>73</sup>河内屋はおそらくこれを金銭ないし振手形で引き出す便宜を銭屋市兵衛から得ていたのだろう。

文化十三年三月の「一札」<sup>74</sup>は、泉州貝塚丹波屋八郎右衛門から積み登された銭六〇〇貫文について市兵衛と金屋与右衛門・河内屋五兵衛が申し合わせたものである。この六〇〇貫文は金屋・河内屋が丹波屋から買い取ったものであったが、彼らの取引両替である銭屋市兵衛方に積みのぼせたために、市兵衛が代銀を渡す旨を記した受取書を出してしまった。そのため金屋らはこの受取書を丹波屋から取り戻し、銭は市兵衛に売ることにして両替取引通に銭を預け入れ代銀を受け取ることで決着している。この一件からも二代目市兵衛

も初代同様、銭を多量に必要としていたことが推測される。

銭市銀控帳から二代市兵衛の経営動向を分析しよう。図2からわかるように、文化後期から文政初年までと、文政改鑄後で違いがみられる。有銀は前半でおちこみ、文政四年頃を境に回復して天保三年に市兵衛家の経営全体を通して最大の銀一二七貫目余に達する。二代市兵衛の経営を前半と後半にわけて検討しよう。

前半の収入は前代同様、利銀が最多で銭利が次ぐ。ただ利銀は前代の末期よりは減額し、年銀一〇〇一二貫目程度で、文化九年と文政元年には特に落ち込んでいる。銭利も文化前半ほどの水準ではない。小判利は微増して銀二貫目の水準を保ち、文政三年には改鑄の影響で巨額の収益をあげている。

この時期の利銀や銭利の不振の理由は銀控帳からはわからない。草間伊助が「草間伊助筆記」巻四<sup>75</sup>で指摘している文化七〇九年の幕府買米御用による大坂の銀詰まりと市況の悪化が影響している可能性がある。買米に銀納を認めたことから、「市中買穀之もの共皆銀上納ハ、右之通両替方へ預け置候銀ヲ俄ニ取立申候事故、取引得意多キ両替屋ハ、諸方ハ一時に正銀被<sub>レ</sub>取立、融通之道ふさがり、迷惑難<sub>レ</sub>及、手許差支、無<sub>レ</sub>抛店ヲ仕廻、諸方取引も絶へ申候時ハ、市中万物自然ト不繁昌ニ相成リ」と、得意先が銀を引き出したことから両替屋が差し支え、銀詰まりとなつてしまったのである。これ

により米切手入替が停止されてかえって米価が下落し、大名貸も破談となったという。先に述べたように銭屋林兵衛がこの時期に休店したのは、こうした事態に対処しきれなかったのかもしれない。

注目されるのは算用帳収入で、次第に減少し、文政二年の銀三五九貫余の収入を最後に、銀控帳から姿を消す。その後は文政十二年に六一五貫余、天保元年に七五九貫余と、単発的な収入があるだけである。また銀控帳では文政二年正月に銀五貫四七二匁余を「下地之分損銀引」として支出している。さらに年末に特別な損銀引を行っており、銀三八七匁余を「損銀引」としたほか、三六貫四六匁余という多額の銀を「引」として支出した。この内容はわからない。しかし時期的に考えて、これが算用帳収入と関連している可能性は高い。そして算用帳を領主金融に関するものとすれば、文政二年を最後に領主金融の資本を銀控帳から除いたことになる。逸身家文書のなかの銭屋市兵衛関係の史料には領主関係のものはほとんどないことから、市兵衛が領主金融から撤退した可能性が高い。

さらに本家三代佐兵衛の動きもあわせて考えなくてはならない。三代佐兵衛は、文化七年頃から大名貸に関わっているが、文政二年には「諸家徳」<sup>76</sup>という領主金融の損益計算簿を作成して大名貸に本格的に乗り出している。別家市兵衛の算用帳を領主金融の収入と考えて、本家の動きと関連づけると、銭屋佐兵衛の暖簾内で領主金融

を本家へ集中した可能性が高いのではないだろうか。

また文政三年正月から慶応二年(一八六六)まで、銭屋佐兵衛の暖簾内で佐兵衛・源兵衛・勘兵衛・市兵衛・林兵衛が毎年定額の積み立てを行っていることが注目される<sup>77</sup>。市兵衛は年銀五貫目を支出した。この額は市兵衛の通常の年の支出の三割前後を占め、決して少ないものではない。この積銀には利子はつかず、本家において蓄藏された。天保三年正月の積み立てを最後に、佐兵衛以外は積み立てをやめて全額を引き出している。

この積銀の意図は何か。一般的には非常時の備えと考えられるが、そうであってもこれが現貨幣を穴蔵に置き、いわば死蔵することを意味していたかどうかはわからない。たとえば別家らが大名貸債権を本家に譲り、それから上がる収益を積み立てたとも考えられないことはない。しかしその性格については今後の課題としておきたい。

いずれにせよ文政改鑄という元文以来の大増鑄を期に、銭屋佐兵衛の暖簾内で大きな機構改革が行われたことは確かだろう。ただこれが窮迫的に行われたともいえない。文政改鑄により貨幣両替の利益が見込まれた上に好景気が期待されたからである。むしろ銭屋佐兵衛の暖簾内一統は好機とみて、本家に領主金融を集中し、分家・別家が町の両替屋として商業金融を担う体制をめざしたのではないだろうか。

次に二代市兵衛前半の支出を検討する。図2に明らかのように、二代市兵衛前半には有銀減少の原因となっている三度の突出がある。最初の大きな突出は初代市兵衛から二代市兵衛への代替わり後の文化八年暮に、その年の損銀とは別に銀一〇一貫一八〇匁八分を、「右ハ銀貸帳・年賦帳・留帳附込并ニ金銀錢当座貸惣々高付出し、但し別帳面ニ付出し有之也」として支出したものが大部分である。初代死後に店卸しをして、貸付や年賦貸の損失だけでなく、金銀錢当座貸である両替取引の損失を銀控帳から別帳に移したのである。こうした先代からの損銀を見つけ出して支出することは文化十年まで続いた。どのような帳簿に移されたか記載がないが、別の箇所では年賦帳や永代帳などへの付け替えがある。たとえば文化十四年末に六貫六六匁余の損銀を銀控帳から支出しているが、「右者永代帳へ記ス有之也」と記されている。また文政四年正月にも銀三貫九九九匁を「永代帳方引」として支出している。損銀は初代・二代とも恒常的に支出されているが、あきらめきれずに銀控帳の有銀のなかに不良債権として残されたものがあり、それはやがて「永代帳」なる別帳簿に記されても銀控帳有銀に含まれているが、それが最終的に「永代帳」からも除かれて銀控帳上でも処理されたということではないだろうか。次の文化十二年の突出は久左衛門町家屋敷の取得関連の費用の支出である。

三つ目の支出の突出は、領主貸有銀と推定した文政二年末の銀三六貫四六匁余の「引」と、銀三八七匁余の「損銀引」である。

世帯方入用は銀六貫目程度までに増えた。注目されるのは文化十年に「店之者へ心附銀也」として銀二七〇匁の奉公人に対する給付が登場し、文政九年まで額が次第に増えていくことである。菊屋町の宗旨人別帳によると、初代市兵衛開店以来下人は二〜四名であるが、当初は暇出しと雇い入れが多く、定着していない。文化期には五年をこえて勤める者も出てくるが、ほとんどが吉、く助といった手代未満の「子供」名である。初代市兵衛は自ら店の仕事に携わり、若い奉公人を補佐的に使っていたものと考えられる。とても「大店」といえない規模であるが、基本的に本両替の店において得意先回りをするのは「子供」の役割で、本両替仲間の相庭会所に出る相庭役は主人が兼ねることも多く、この程度での人員でも成り立ちうるのだろう。

二代目市兵衛相続前後には初代からの奉公人はほとんど入れ替わっていなくなるが、なかには一人前の手代として大人名を名乗り始めた者もいた。菊屋町宗旨人別帳に錢屋市兵衛家が載る最終年である文化十一年十一月の奉公人は、徳兵衛・与兵衛・卯兵衛・虎蔵・喜助の五人である。<sup>78</sup> 徳兵衛は文化六年九月に徳松名で抱えられ、文化八年九月の代替わりに際して徳兵衛と名を改めている。与兵衛は

それより古く文化四年三月に磯吉名で雇われ、文化四年九月に名を改めている。宇兵衛は文化七年九月に庄吉名で抱えられ、文化八年九月の代替わりに際して名を改めた。いずれも「子供」として雇われ数年を経て大人名を名乗って間もなく若い、二代市兵衛は彼らを手代として仕事を分担させ、心付を渡すようになったと考えられる。虎蔵・喜助はいずれも代替わり後に雇われており、文化十一年段階では「子供」と考えられる。

次に二代市兵衛の後半、文政改鑄後の経営について検討する。この時期の収支は文政十年を除き黒字で、有銀は天保初年まで増加し、天保三年には銭市銀控帳で最大の一三七貫六一八匁余となった。

収入の中心である利銀は文政八・九年におちこむが、その他の時期は銀一五貫目前後で、天保に入ってから二〇貫目を超えた。また銭利収入が好調で、文政八・九年には利銀を上回っている。文政十一年から天保初にかけて小判の利が五く七貫目と、それ以前の二倍近い収益を記録していることが注目される。

支出では、初代と異なり損銀が少ないことが注目される。利銀との相関関係では、初代の場合は利銀が増えると損銀も増えているが、二代後半では文政十二年に三貫七三九匁余の損銀がある以外は銀一貫目代かそれ以下である。損失がないのか、損失を計上しなかったかは不明であるが、おそらく後者であろう。これについては後に検

討する。

この時期の最大の支出項目は世帯方入用である。文政改鑄後のインフレによる物価上昇のため次第に増加し、天保期に入ると銀一二貫目を超え文政改鑄前の二倍になっている。また先述した年銀五貫目の本家での積銀は継続され、市兵衛の収支が赤字となった文政十年にも行われた。また奉公人への給付は文政六年には銀一貫目となり、文政十一年には「亥年（文政十年）分六兵衛へ給料」として銀一貫二九〇匁が現れる。二代市兵衛が相続してから一六年たち、出入が激しかった奉公人もそれなりに定着して、手代のなかから番頭的な奉公人が育ってきたであろう。

#### ⑤三代市兵衛の経営（嘉永二年）

天保四年に三代市兵衛への代替わりがあった。三代市兵衛は天保七年から天保八年前半までに道頓堀南岸の吉左衛門町に家屋敷を購入し普請をしている。銭市銀控帳では、これを「出店」として、「小売并諸商」の収入を計上している。久左衛門町の両替店とは別に、中芝居のある吉左衛門町において、往來の客相手に店先での銭小売などの商売をしたと考えられる。

ところがこの吉左衛門町の家屋敷は、天保八年九月以降には購入費の半額ほどの銀六貫六九九匁余で売り払われてしまった。時期的に一致するので、前章で述べた銭屋佐兵衛別家の又兵衛に引き継が

れたのではないだろうか。その一方で、市兵衛は同年十一月に石灰町にあった佐兵衛所持の借屋を借りて家賃を払っている。同月「駄賃銭之事」<sup>79</sup>では、三郷惣馬持中と銭米塩薪などの商品を長堀・東横堀・道頓堀の浜からあげて石灰町の居宅まで運ぶ駄賃の取り決めをしているので、先に述べた吉左衛門の outlet とは異なり両替店を移したとみられ、天保九年二月改正新版「浪花両替手柄競」では銭屋市兵衛の店は石灰町に変更されている。ただ久左衛門町の家屋敷も天保一四年まで所持し続けられており、十二年から十三年には久左衛門町の家屋敷を貸した家屋敷徳が銀控帳に計上されている。

市兵衛の両替店の石灰町への移動は、本家の借屋に入居したこともあり、本家との相談の上でなされたのは間違いないだろう。また天保八年末の佐兵衛の分家佐一郎の備後町四丁目での本両替開業や同年に行われた天保改鑄と関係があると思われる。佐一郎家に両替部門を移管した後も銭屋佐兵衛は本両替仲間にも所属し続けるが、業務は大名貸などの貸付業に特化したので、居所の石灰町には銭屋の暖簾内の両替店がなくなってしまった。佐一郎の備後店は南船場で、少し距離がある。天保金銀の通用開始を好機とみて、旧来の得意先を失わないため、市兵衛の両替店を石灰町に移動させたのではないだろうか。

市兵衛側にも久左衛門町を離れる理由があった。三代市兵衛の経

営が困難であったことは、嘉永六年十二月二十三日の四代銭屋市兵衛（幼少ニ付代判亦兵衛）の「乍恐口上」に記されている。これは嘉永度の御用金賦課の際の嘆願書である。<sup>80</sup> それには、「先年者両替渡世之者ニ在<sup>レ</sup>之、私父市兵衛存生中<sup>ニ</sup>不如意ニ候<sup>ニ</sup>」、「素<sup>レ</sup>不如意之事ニ候得共、種々繰合せ斗を以、渡世相凌罷在候」などがある。御用金減額願いであるため、ある程度割り引いて考える必要があるだろうが、三代市兵衛の経営が順調ではなかったことはうかがえるだろう。こうした経営不振、ないし借財が移転のきっかけだったのではないだろうか。

天保期には伊勢参りや川浚え・砂持などは繁昌したが、道頓堀の大芝居は不入りが続いたことが指摘されている。<sup>81</sup> 特に天保七年には「世間ふけいきにて芝居はまらず（中略）浪花の芝居にハこれまでかようなる事ハなき事ナリ」、天保八年には大火で「市中淋しく一向不入ニて無程相休ム」「市中一統芝居気ならず」といった状況が続いていた。<sup>82</sup>

三代市兵衛は本両替以外の仕事についても模索した。天保十三年十二月には石灰町の銭屋六兵衛が心斎町の借蔵からの糠の運送に関する取り決めを結んでいる。この文書は市兵衛関係の文書といっしよに逸身家文書のなかに伝来したので、市兵衛に関連する糠商売であろう。ただし銀控帳で糠方の収入があるのは天保十四年だけで

あり、継続しなかったようである。

三代銭屋市兵衛は嘉永二年閏四月に病死し、八歳の倅が四代市兵衛を相続したが、両替店は休店した。前掲嘉永六年十二月二十三日付「乍恐口上」では、「去ル酉年閏四月父市兵衛病死仕候後段々不仕合ニ相成、確<sup>二</sup>差詰、両替渡世も難<sup>一</sup>相成、休店仕、本家佐兵衛<sup>江者</sup>多分之損失相懸候得共、同人憐愍を以、只今<sup>二</sup>而者<sup>一</sup>合力致呉候故、母子漸々相暮候迄ニ罷在、時ニ寄候<sup>而者</sup>所持之品等をも売払相凌候事<sup>二</sup>而<sup>一</sup>」などと述べられている。三代目死後は両替店経営が不可能となり、休店に際しても本家佐兵衛に損失を及ぼしたことがわかる。翌嘉永三年の石灰町「家持借家人別帳」<sup>83</sup>によれば、石灰町の銭屋佐兵衛借屋に四代市兵衛九歳・母ゆう・妹二人・下女一人の別人別が載っている。

図2から有銀の動きをみると、天保四年に銀二八貫目ほど減少している。これは先代同様代替わりにともない再勘定を行い、不良債権を損銀や年賦銀として控除した結果である。「文政六末年店卸ち巳(天保四年)卸辻違目」三貫六百五拾八匁余と「先々代ち損銀引」五一貫五四匁余が支出された。初代からの不良債権がまだあつて改めて控除していることがわかる。

また天保八年にも店卸しをして、「諸方損銀或者年賦」として銀二九〇貫九七九匁六分という巨額を支出した。これにより有銀は激

減してマイナス七九貫余となった。銭屋市兵衛の有銀はその後もプラスに転じることはない。この年前後には先述したように吉左衛門町の出店の売買があり、同年九月には本家において積み立てた積銀七七貫目を取り返して収入に加えるなど多額の銀の動きがあった。それが店卸しの理由であろう。

銭市銀控帳をみると、天保十一年には河内屋庄助から銀一貫八九六匁を受け取り二貫四七匁余を引き、大和屋弥三郎から銀四貫二〇〇匁を受け取り借銀九貫目を年賦銀として引き、松本屋与八・大和屋市兵衛の銀七貫目を引くなど、不良債権を別帳に移している。こうしたことは弘化四年にも行われており、不良債権を明確化して回収することに尽力していることがわかる。そのため天保末以降は年賦銀・戻り銀の収入が現れ、利銀収入も回復した。ただ同時に不良債権の累積が続いていた。銭市銀控帳の天保十五年の項には、支出通残銀として雑喉屋常次郎三匁一分五厘、阿波屋清助三二匁四分一厘、市物屋又兵衛二匁九分、土佐屋清兵衛九八一匁四分九厘、灘屋治兵衛一〇匁五厘、山本屋源兵衛五二匁三厘、鉛屋安次郎七七六匁六分八厘、八幡屋六兵衛一貫八五匁四分七厘、丹波屋茂兵衛五二匁六分などが支出として計上されている。山本屋に関しては、他にも銀二貫目と一貫目の証文が滞っている。八幡屋六兵衛は文化末年から銭屋市兵衛と関係を持つている古い得意先であるが、天保末年に

なつて両替取引に大きな損失を出したのである。この損失はおそらく八幡屋六兵衛・八幡屋勝三郎と連名の弘化四年七月付の銀一貫四五〇匁の「預り申銀子之事」<sup>86</sup>に付け替えられたが、回収できずに逸身家文書のなかに残っている。天保末年からは幕府天保改革の諸政策や御用金賦課、大名貸の御断りによる金融梗塞などが、大坂の市況に悪影響を与えていた。

また小判利・銭利など貨幣両替収入も低水準で、天保十三年には両者とも損失を出している。天保三〜四年頃から銭相場が、天保八年頃から金相場が下がり貨幣売買の利益が薄くなつており、天保八年に天保改鑄が行われたのにも関わらず利益は上がつておらず、むしろ違目といわれる相場変動による損失が計上されている。天保後期には幕府が貨幣相場に介入し、特に銭価については引き上げ策を強行した。たとえば天保八年に本両替仲間に銭の買い持ちを命じ、同十四年には銭一貫文銀一〇匁以下の売買を禁じて相場を公定している。<sup>87</sup>これらの大坂の商慣習や仲間の自律性を無視した経済政策が本両替に与えた打撃は大きかったと思われる。

しかも天保以降も物価高は続き、銭屋市兵衛家では前代に引き続いて支出が増加し、多い年は銀四〇貫目をこえた。しかも天保十四年から弘化期にかけて、手代の引負が連年のように支出に計上されている。当主が幼く中心となる手代もなく、店のなかが混乱してい

ることを想像させる。

この時期には、多くの年で収支が赤字になっている。銭屋市兵衛家の本両替経営において単年度収支が赤字となつた年は十三ヶ年あるが、そのうち七ヶ年は天保八年以降で、天保八〜十一年は四年続きで赤字となつている。このことは銭市銀控帳の有銀が表面上マイナスになつたこと以上に危機的であり、両替店の閉鎖につながつたと考えられる。

#### おわりに

以上、銭屋佐兵衛の別家について検討し、その一人である市兵衛の本両替経営について銀控帳を中心に検討した。史料の限界があり、経営動向の背後にあるものを十分に考察できたとはいえないが、中堅クラスの本両替の特質についていくつかを指摘しておこう。

第一に、銭屋佐兵衛の暖簾内において本両替が創出されたのは、寛政期（一七八九〜一八〇二）から文政期（一八一八〜三〇）初年までの限られた時期である。またその経営基盤は本両替が多い船場北部ではなく、島之内や上町南部など、大坂南部の小売・繁華地にあった。銭屋市兵衛が文化十二年（一八一五）に菊屋町から芝居で繁栄していた道頓堀久左衛門町へ進出したように、化政期の都市的繁栄と庶民的な消費経済の伸張を背景としていたのである。



錢屋市兵衛と両替取引を行った得意先も、名の知れた大商人や問屋というよりは小売商や錢屋、芝居関係者などであった。こうした層にまで両替取引が拡大したことは大坂の信用社会の成熟をあらわしている。彼らは錢を取り扱うことが多く、開業当初の市兵衛の収入としては、とりわけ錢利が重要であった。本両替というと金銀、錢の取り扱いが錢両替という印象があるが、必ずしもそうではないのである。

ただ得意先の経営基盤の弱さは市兵衛家の経営基盤の弱さでもあった。両替取引が、明治期の文献が述べていたように信用に基づいて安定的に行われたとはいえないことは明らかである。市兵衛の場合得意先が比較的小身であることもあって、開業当初から得意先相手の取引は滞りを生じていて、有銀の内に不良債権が蓄積されていたのである。代替わりなどの際に不良債権の処理が行われ、別帳に移されるなどして有銀が減額されているが、すべてが処理されたわけではなく、最終的には天保八年の処理により有銀がマイナスとなる異常事態にいたった。

錢屋市兵衛の経営動向は短い期間で変化している。個別の事情もあるだろうが、本質的には大坂の市況の波に左右されているためである。商人の個別経営の分析では、よくいわれるような近世後期とか幕末といった括りより短期間での経済の動きをみていく必要がある

だろう。そして市況の変化に幕府の政策が及ぼす影響は大きい。経営が不振であった二代市兵衛の後半、文化後期と天保期はいずれも幕府の政策により金融閉塞が起こった時期である。とりわけ大塩平八郎から水野忠邦にいたる幕府政策―大坂において民間の力により形成された信用社会への干渉と解体―は、錢屋の暖簾内の本両替たちの基盤を揺るがすものであった。そしておそらくそれは、彼らだけに限られるものではなかった。

錢屋佐兵衛の暖簾内は、こうした市況の動きに、本家を中心に対応していこうとしている。まず文政改鑄を契機に本家佐兵衛が領主金融に本格的に関わり、おそらくは別家らの領主金融を吸収した。錢屋市兵衛など別家は町の両替としての道を歩んだ。本両替の本質は商業金融にあり、領主金融との関わりは様々であるが、特に近世後期には領主金融のリスクが高いために、小資本の本両替にとつては必ずしも有利な商売ではないという判断ではなかっただろうか。

また天保八年末には本家佐兵衛が領主金融などの貸付業に特化する。両替部門は分家佐一郎に移譲されたが、それは源兵衛の経営をも受け継いでおり、市兵衛もそれに関連して石灰町に店を移した。錢屋佐兵衛の暖簾内を見る限り、本家と分別家の経営は密接に関連しており、困難な状況のなかで生き残りをかけて暖簾内のありかたを変化させていったのである。

本論作成にあたり、いろいろお世話になり、また有益なご教示をいただいた逸身家文書研究会の皆様、とりわけ逸身家の歴史について興味深い事実を発掘し続けてくださっている逸身喜一郎先生に感謝の意を表します。

## 注

- 1 錢屋佐兵衛家の文書の一部は三井文庫や大阪商業大学商業史博物館佐古文庫に含まれているが、そのなかには錢屋市兵衛関係の史料はない。
- 2 錢屋佐兵衛の天保期までの経営については別稿を準備中である。
- 3 逸身家文書8―5。
- 4 「家徳扣」(逸身家文書8―4)によれば、文政八年段階では佐兵衛家は松原町の屋敷を所持していない。
- 5 初代佐兵衛の隠居の年はわからないが、銀控帳には明和七年に「隠居」佐治兵衛への貸付の損失引あり、それ以前の明和四年に銀控帳の記載方法に変化があり普請入用があることから、この頃に二代佐兵衛に家督を譲ったのではないかと推定している。
- 6 黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第二輯(大阪商科大学経済研究所、一九三五年)所収「商業慣例調」。
- 7 黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第三輯(大阪商科大学経済研究所、一九三七年)所収「両替商治革史」。
- 8 前掲「両替商治革史」。
- 9 安岡重明『財閥形成史の研究』(ミネルヴァ書房、一九七〇年)。
- 10 両替系摺物の詳細と所蔵については、中川すがね『大坂両替商の金融と社会』(清文堂出版、二〇〇三年)第六章「摺物史料に見る本両替仲間」の表8を参照のこと。
- 11 前掲「摺物史料に見る本両替仲間」。
- 12 逸身家文書中では逸身となっているが、現在同家は逸見を名乗られているとのことである(逸身喜一郎氏御教示)。
- 13 三井文庫所蔵「両替仲間行司帳」。
- 14 大阪大学文学部日本史研究室所蔵難波家(平野屋)史料。
- 15 逸身家文書2―60―1「天保御用金」(天保十四年七月)。
- 16 西高津の錢屋林兵衛が掲載されるが、これは上町組木綿屋であって、錢屋佐兵衛の暖簾内の林兵衛ではない。
- 17 逸身家文書2―58―1。
- 18 前掲「両替商治革史」。
- 19 大阪市立中央図書館所蔵南瓦屋町水帳・同水帳絵図(安永七年)。同図書館には安政期までの南瓦町の水帳・水帳絵図が残っており、これらから錢屋勘兵衛家の動向を検討した。
- 20 逸身家文書2―18―4―2―1「一札」(錢屋佐兵衛病身二付入判錢屋勘兵衛より奈良屋善兵衛宛、寛政十二年七月)。
- 21 逸身家文書2―43―1。
- 22 大阪大学文学部日本史研究室所蔵難波家(平野屋)史料
- 23 逸身家文書2―49―11「預り申銀子之事」・2―49―12「家賃利銀請負証文之事」・2―9―26―8家賃利銀請負証文之事」。
- 24 逸身家文書1―7―7―1「進上」。
- 25 文政五年改正大新板の「浪花持丸長者鑑」で「備一錢屋惣兵衛」として東の前頭四三枚目(東西一二五枚目の内)がいるが、これは安政二年八月改正の「浪花当時流行取引繁栄鑑」(大阪府立中之島図書館

- 所蔵「保古帖」という摺物に「地金鉛五人のうち」として載っている備後町一丁目の銭屋宗兵衛であり、明治二年には金物商の組合規約集『大阪経済史料集成』第八巻)に、備後町一丁目森井宗兵衛として現れる。
- 26 佐々木淳之介『幕末社会の展開』岩波書店、一九九三年)Ⅱ章の「幕末期河内の豪農」では、河内国丹南群岡村の豪農岡田家が米屋喜兵衛・具足屋半兵衛とならんで銭屋宗兵衛に嘉永から安政にかけて貸付をしていることを紹介している。ただし佐々木氏はこれを一般的な貸付と誤解されており、福澤徹三「豪農金融の展開と地域」(渡辺尚志編『畿内の豪農経営と地域社会』思文閣、二〇〇八年)において修正された。また大阪府茨木市域の農村にも同家の両替通が多く残っている。
- 27 九州大学記録資料館九州文化史資料部門所蔵千原文書「乍恐以書附奉願上候」(鈴木町大坂屋定次郎・中津町平野屋彦兵衛より日田代官寺西蔵太役所宛、天保九年五月)。
- 28 大阪府立中之島図書館所蔵「本町壱町目水帳付絵図」(安政三年五月)。
- 29 逸身家文書2—55「御用金一件」(文化十四年五月二十四日)。
- 30 前掲逸身家文書「進上」。
- 31 逸身家文書7—38「覚(手当銀元帳)」の文政九年正月にそれまで積み立てた銀一五貫目を取り出した際に「林兵衛店休二付出入渡」とある。
- 32 逸身家文書1—3—2—18—1「婚礼諸用控」。
- 33 仲田正之編『大塩平八郎建議書』文献出版、平成二年所収「不正無尽取調書」(天保元年正月)。
- 34 八百(尾)屋新蔵は化政期の両替系摺物に佐渡嶋町(新町)として載り、銭屋を営んでいたと考えられる。
- 35 蔵並省目『海保青陵全集』八千代出版、一九七六年。
- 36 逸身家文書のなかには銭屋源兵衛が銀預かりをしている春日講の「調達銀仕法帳」(7—42—3)が一冊だけある。
- 37 「浮世の有様」(『日本庶民生活史料集成』第一巻、三一書房、一九七〇年)の「文政十二年大塩の功業」は弓削や八百屋による悪行について詳しいが、不正無尽取り組みについては直接の論及がない。
- 38 逸身家文書2—54の銭屋佐一郎「銀控帳」に、それ以前の銭屋源兵衛への貸銀の利息について記述がある。
- 39 前掲「天保御用金」所収天保十五年八月二十六日「乍恐以書付奉願上候」。
- 40 大阪商業大学商業史博物館所蔵佐古慶三教授収集文書「仲間一件控」。これは文化七年正月のものであるが、名前帳の連印部分は文化十年頃までの実態をあらわしている。
- 41 逸身家文書2—56。
- 42 逸身家文書2—2。
- 43 大阪府立中之島図書館所蔵菊屋町文書1「宗旨人別帳」。阪本平・宮本又次編『大阪菊屋町宗旨人別帳』第四巻(吉川弘文館、一九七四年)に翻刻・刊行されている。
- 44 大阪府立中之島図書館所蔵菊屋町文書1—16「菊屋町水帳(附図共)」。
- 45 名前からみて、市兵衛は武兵衛のもと養子で池田に帰されていた市太郎である可能性もある。銭屋市兵衛家は後々までも池田との関係が深いことからその可能性が高い。
- 46 黒羽兵治郎編『大阪商業史料集成』第四輯(大阪商科大学経済研究

- 所、一九三八年）所収。
- 47 乾宏巳『なにわ大坂菊屋町』柳原書店、一九七七年。
- 48 大阪経済史料集成刊行委員会編『大阪経済史料集成』第一巻、大阪商工会議所、一九七七年。
- 49 逸身家文書3—43—8—10「江戸為替金連印定置証文之事」（播磨屋伝兵衛・播磨屋文蔵より銭屋市兵衛宛、文政七年十二月）。
- 50 神戸市教育委員会編・刊『神戸市文献史料』第一四巻（一九九四年）一二二頁。
- 51 前掲『大坂両替商の金融と社会』第四章「大坂における信用社会の成立」において、鴻池屋与三吉の両替取引において得意先同士で振り替えという形で貨幣が動いていることを検討した。
- 52 松阪市史編纂委員会編『松阪市史』第二二巻（蒼人社、一九八三年）所収「店掟之事（竹川両替店）」。
- 53 日野竜夫・多治比郁夫編『校本難波丸綱目』（中尾松泉堂書店、一九七七年）所収安永六年版「改正増補難波丸綱目」。
- 54 前掲『大阪経済史料集成』第一巻所収、天保三年刊「商人買物独案内」・弘化三年刊「大阪商工銘家集」。
- 55 銭屋弥助は天保十年には佐兵衛から相続のための元手銀を受取り、貸付も免除されて、本家・別家須関係は親類並みに変更されている。両替系摺物では弘化二年の「浪華両替取引独案内」までは掲載されているが、本両替としての活動は天保十三年段階では難しくなっていたと考えられるので、顧客を銭屋市兵衛に紹介したのではないだろうか。
- 56 前掲『大坂両替商の金融と社会』第四章「大坂における信用社会の成立」表5で銭屋佐一郎の天保九年段階の得意先を整理している。
- 57 逸身家文書3—35—12「一札」の若狭屋清五郎など印鑑書の添書で借屋人とわかる者がいる。
- 58 前掲菊屋町文書2—12「大和屋理助相手取両替取引出入に付丁内より出訴」。前掲『なにわ大坂菊屋町』二二四～二五頁、『大坂両替商の金融と社会』第五章「銭屋と銭相場の形成について」にも紹介されている。
- 59 前掲「店掟之事（竹川両替店）」。
- 60 前掲『大阪商業史料集成』第四輯。
- 61 前掲『大坂両替商の金融と社会』第四章「大坂における信用社会の成立」。
- 62 前掲『大坂両替商の金融と社会』第四章「大坂における信用社会の成立」。
- 63 前掲『大阪商業史料集成』第四輯。
- 64 前掲菊屋町文書1「宗旨人別帳」。
- 65 前掲菊屋町文書1「宗旨人別帳」。
- 66 大阪商業大学商業史博物館所蔵佐古慶三教授収集文書「仲間一件控」。
- 67 逸身家文書2—18—4—2—9「家賃証文二通受取」（銭屋佐兵衛代市兵衛より柏屋次兵衛宛、申七月九日）。
- 68 逸身家文書3—43—4—43「預り申金子之事」大和屋次兵衛より銭屋大吉宛、文化六年正月他。
- 69 文政九年から天保五年まで六兵衛にあてた質物請状・銀預証文が残っている。文政十年から天保三年まで二代市兵衛は六兵衛に年一貫二九〇匁の高額の給料を支払っており、店で重要な役割をはたさせていたと考えられる。しかし市兵衛家関連の銀預証文等の主体となっていること、天保五年三月・九月の質物請状の宛先では銭屋六兵衛の代

- 判を三代市兵衛がつとめていることから、ただの奉公人とは考えにくく、市兵衛家の分家か別家と思われる。
- 70 大阪商業大学商業史博物館所蔵古慶三教授収集文書「道頓堀久左衛門町水帳」(文化十二年)。
- 71 前掲『大坂両替商の金融と社会』第四章「大坂における信用社会の成立」で紹介した銭屋佐一郎・山本屋伊右衛門の例。
- 72 逸身家文書3-35-12「一札」の若狭屋清五郎など印鑑書の添書で借屋人とわかる者がいる。
- 73 天保六年に新町河内屋庄助が中の芝居の土地・建物を買得したときの算用によると、芝居興業中の収入は一日約二〇貫文とされているので(竹下喜久男「天保期道頓堀中の芝居と芝居主山村九郎治」[「中部よし子編『大坂と周辺諸都市の研究』清文堂出版、一九九四年」]、ほぼ一致する。
- 74 逸身家文書3-43-5-8。
- 75 『大阪市史』第五、大阪市参事会編・発行、一九一一年。
- 76 逸身家文書7-36。
- 77 前掲逸身家文書「寛(手当銀元帳)」。文政以降も領主金融に関わっている別家の内銭屋宗兵衛はこの積銀に参加していないことが注目される。
- 78 前掲菊屋町文書1「宗旨人別帳」。
- 79 逸身家文書3-43-2-3。
- 80 逸身家文書2-42-4-1「乍恐口上」(嘉永六年十二月二十三日の銭屋市兵衛幼少二付代判亦兵衛より、嘉永六年十二月二十三日)では、金百疋を上納したいと惣年寄に願ひ出ている。
- 81 前掲竹下喜久男論文。
- 82 大阪市史編纂所『近來年代記』(大阪市史料調査会、一九八〇年)。
- 83 逸身家文書7-2。
- 84 前掲竹下喜久男論文によると、河内屋庄助は新町西口の味噌屋で天保七年に中の芝居の芝居主となったが、天保十一年には借銀が滞り出訴されて、中の芝居は流れ込みとなり、翌年に近江水口の豪商山村九郎治に売却されている。
- 85 逸身家文書3-43-5-16「返り一札之事」(八幡屋六兵衛より銭屋市兵衛宛、文政五年五月)に、文化十三年正月から取引をしている旨が記されている。
- 86 逸身家文書3-35-35。
- 87 前掲『大坂両替商の金融と社会』第五章「銭屋と銭相場の形成について」。

